

ナシ萎縮病の発生状況調査実施要領

ナシ萎縮病の全国における発生状況調査の実施については、次の方法により行うものとする。

1 調査地点及び調査時期

本病の調査は、各都道府県におけるナシの病虫害の発生予察調査と併せ、定点調査ほ場及び巡回調査ほ場において行う。調査時期については、葉の症状が現れやすい5月中旬から6月中旬（ナシの展葉期）とする。

なお、ナシの病虫害の発生予察調査を行っていない都道府県では、可能な範囲で調査を実施していただきたい。

2 調査方法

（1）展葉期の葉について、次の典型的な症状の有無を目視により調査する。調査に当たっては、調査用写真資料（別紙）を適宜参照する。

ア 展葉初期の症状として、葉先が極端に細くなり、黒変して枯死する。また、健全部と枯死部との境界は赤みを帯びることが多い。

イ 葉が展葉しても、葉先の黒変・枯死部は目立ち、健全部との境界が赤みを帯びる場合がある。

ウ 展葉後、日数を経た場合でも、葉先の黒変・枯死部は残る。軽症の場合は、葉叢の基部の葉だけに症状が現れ、上位葉には症状が現れない。

エ 樹全体における発症の仕方として、亜主枝・主枝単位で発症しやすく、また、枝上の葉叢が連なって発症する。

（2）診断について判断に迷うような症状しか見られなかった場合、葉、枝及び樹の症状等の写真を記録し、事前に植物防疫課に連絡した上で、（国研）農業・食品産業技術総合研究機構果樹・茶業研究部門宛て相談する。

（調査の参考）

平成 24 年に（独）農業・食品産業技術総合研究機構果樹研究所（当時）が行った「ナシ萎縮病（萎縮症）診断ワークショップ」において、参加者が持ち込んだ試料を診断した結果、発生品種の7割以上が「幸水」であったこと、樹齢が15年以上での発病が多いこと等が報告されている。

3 調査結果等の報告

各都道府県は、本調査の終了後、調査ほ場ごとに、所在地、調査樹数、症状が確認された樹数、品種名、主な症状、樹齢等の調査結果について、7月末までに、発生調査結果報告書（別紙様式）にとりまとめ、速やかに植物防疫課まで報告する。

また、調査ができなかった都道府県にあつては、その理由（調査園地を確保できない、ナシ産地がない等）を報告する。

葉の症状によるナシ萎縮病の見分け方

ナシ萎縮病は展葉期の葉の症状により診断可能である。特に品種「幸水」では典型的な症状が出やすく診断は容易である。

発症のしかた



亜主枝・主枝単位で発症しやすい。



同一枝の葉叢が連なって発症する。

展開初期の葉の症状

「幸水」

葉先が極端に細くなる。



健全部と枯死部との境界は赤味を帯びることが多い。



葉先は黒変して枯死する。



類似症状
(萎縮病ではない)



葉全体が細くなる。
葉先は黒変・枯死することはない。

(本症状の原因は不明)

展開初期の葉の症状

「幸水」以外

「幸水」と同様に、葉先が極端に細くなり、黒変して枯死する症状が見られる。

「豊水」



※「豊水」での発生は「幸水」に次いで多いが、発生率は「幸水」の半分以下。

「新水」



※「新水」でも発生するが、その多少は不明。

「二十世紀」



※「二十世紀」での発生は少ない。

展開後期の葉の症状

「幸水」

展葉しても健全部と枯死部との境界が赤味を帯びる場合がある。



展葉後も葉先の黒変・枯死した部分は目立つ。



一見して症状が分かりにくい場合には、葉先が黒変・枯死しているものがあるかどうかを確認するようにする。

展開後期の葉の症状

「新水」

「幸水」以外

「二十世紀」



葉先に黒変・枯死した部分が見られる。

展開後，日数を経た葉の症状

「幸水」

展開後，日数を経ても葉先の黒変・枯死部は残る。



軽症の場合，上位の葉には症状は現れず，葉叢基部の葉のみに症状が見られる。

「幸水」以外

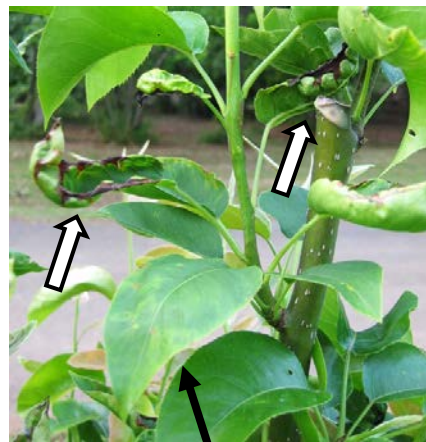
「新水」



葉叢基部の葉のみに症状が見られる。



類似症状
(萎縮病ではない)



基部の葉には症状はない。

(本症状の原因は不明)

平成28年 ナシ萎縮病 発生調査結果報告書

都道府県名:

[illegible]